

報告・資料

創造的苦痛をひき受ける主体形成の課題に向かって
—市井三郎『歴史の進歩とはなにか』再読—

Toward a Subject of Nourishing a Person Who Accepts Creative Sufferings
- Re-reading of Saburo Ichii's "REKISHI NO SHINPO TOWA NANIKI" -

松岡信義

問題として受けとめ、課題として考える

かつて次の記事を目にした。7年前のことである。

先進国、発展途上国……世界にはいろいろな国がありますが、1つの地球の上にながら、大陸には、日本とは違う時間が流れていることが不思議でなりません。時間は、進んでいくと同時に失っていくものでもあるのだと思います。24時間たたかい続けているうちに、日本の時間はすっかり進みすぎてしまい、大事なものをいっぱい失ってしまったのではないのでしょうか。だとすると、先進国とは先に失う国であり、後進国とは、後まで失わない国と言えそうです。¹⁾

豊かさの代償が高くつくものであることに人々が気づきだしてから久しい。自分の所属する山岳会の機関誌にこのように書いた彼女は、大陸の山懐での人々の生活をかいま見ることからも、そのことを肌で感じとったに違いない。

尺度を何に求めるかで豊かさの意味合いと度合いは異なる。よく知られているようにGNP（国民総生産 gross national product）という指標を尺度に用いる場合、豊かさの内実は生活の水準を物質的観点から、すなわち生活用品の豊富さや生活上の利便・快適さといった機能的側面における物理的條件の豊かさから判断しようとするものである。このような判断に割り切れなさ

を感じ、生きていく上での充足感といったような多分に実存的な要素を含んだ観点から、すなわち普通に用いられる言葉でいうところの精神的観点からの尺度を措定しようとする意思も認められる。ブータン王国が標榜するGNH（国民総幸福 gross national happiness）なるものは、さしずめこのような意思の表明であるだろう。

ところで豊かさが増すということは、その豊かさを享受する人々が生活する社会に進歩の跡がみられるということであろう。

もちろん、豊かさを計る尺度の取り方によって進歩の様相は異なることから、物質的豊かさを増大させる進歩様相は必ずしも精神的豊かさを増大させる進歩様相と歩調を合わせる訳ではない。それどころか、今日私たちが直面している問題は、そのような二つの進歩様相の調和的歩調などではなく、まさにその正反対の事態である。

すなわち、物質的豊かさを増大させる進歩様相と精神的豊かさを増大させる進歩様相との矛盾・対立の昂進という事態である。それは、生産技術の進歩が生み出す豊富な商品群と消費経済に煽られる人々の精神の空洞化や、あるいは自然資源の収奪と浪費によってもたらされる環境破壊といったことに顕著にみられる。とくに、いまや誰の目にもはっきりと映じ、実感となって迫られ、もはや手遅れであるかもしれないという不安のなかで対応への行動を余儀なくされている地球規模での環境破壊については、まさに人類の課題とし

てその打開が迫られている隘路（矛盾・対立）がある。それは「先進国の豊かさ」と「途上国の貧しさ」の問題であり、そのことと地球環境との関わりである。

筆者は、先に、「豊かさが増すということは、その豊かさを享受する人々が生活する社会に進歩の跡がみられるということであろう」と述べた。「先進国の豊かさ」と「途上国の貧しさ」の問題という文脈においては、ここでいう「進歩」は物質的豊かさを増大させる進歩様相として措定されよう。ということは、矛盾・対立は、このように、「物質的豊かさ」と「精神的豊かさ」の間においてだけでなく、物質的豊かさの配分をめぐる、あるいは、物質的豊かさが蓄積される過程においても生じているということである。化石燃料の無計画な使用に象徴される経済先進国の「豊かさ」が地球環境の悪化をつくりだしてきたことは、今日、疑いを容れない。この点、「経済成長の速度が最も速い日本は、地球環境、生態系の悪化にたいしては最大ともいうべき責任がある」（弓削 達）²⁾ という指摘は謙虚に受けとめなければならないだろう。

このように考えるとき、「24時間たたかい続けているうちに」日本がいったい失ってしまった大事なもの（＝精神的豊かさ）が「後進国」にあっては今なお失われずにいる、という観想のみに留まっておれないのではないか。物質的豊かさが必ずしも精神的豊かさを保証するものではないとしても、貧しさが精神を傷める事態はこの地球上に遍くみられる事実である。途上国の貧しさの上に乗った先進国の豊かさとは何なのか。一方における豊かさの増大（進歩）が他方の犠牲（退歩）の上に成り立つという人類全体にとっての不条理をどのように考えればよいのか。

市井三郎『歴史の進歩とはなにか』³⁾を再読する機会、ここ数年ことあるごとに意識の前面に浮上してくるこのような思いへの囚われから生じた。きっかけは数年前の『図書新聞』に寄せられていた大野明男の市井三郎追悼稿をたまたま再読したことにある。その追悼稿で、大野は「歴史の----」が書かれたときの市井の執筆動機ないし執筆の背景となる意識と、この著書での市井の論究テーマと主張を次のように紹介して

いた。

いずれにせよ時代は、18世紀以来の欧米モデルによる「進歩＝文明開化」を是とする思想、また「社会主義革命」によって地上楽園が出現するとした思想の見直しを必要としていたのだと思う。

そうした全地球的な状況に対し市井氏は、まさに情熱的な関心を寄せつつ、手法としては欧米の「進歩」論の系譜を探り、「価値」基準のパラドックスを追求、最後に自らの考える新しい「倫理的価値基準」を次のように提示する。

「各人（科学的にホモ・サピエンスと認めうる各人）が、責任を問われる必要のないことから受ける苦痛を、可能な限り減らさねばならない」

一見、ネガティブな形で表現されているこの「価値基準」は、次の補足により、きわめて積極性を持つものとなる。

「不条理な苦痛を軽減するためには、みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身にひき受ける人間の存在が不可欠なのである」

この言葉を、どう読みとるか。また自分の生活設計に、どの程度まで「創造的苦痛をひき受ける」覚悟を組み込むか、などは各人次第だが、私にとっては忘れられない言葉である。⁴⁾

市井が追求した問題と投げかけた課題が、彼自身への追悼稿において、このように紹介されているのを改めて目にしたとき、『歴史の----』は、本稿の初めから述べてきた「筆者自身が囚われている思い」を突き詰める上での貴重な示唆に富んでいたはずだ、という記憶（想念）が呼び覚まされた。（あるいは、ひょっとして、こうも考えられるかもしれない。そもそも筆者が先に述べてきたような思いに囚われることになったのは、以前に『歴史の----』を読んだことで触発されたのではなかったのか、と。こうなると循環論に陥るが、ここではそのような循環の起点を明らかにするのが目的ではない。認識の深まりの過程は単純に直線的な累積のみでなく、フィードバックや螺旋的な経路を

とりながら、個々の事実や考えが、多少ともそれぞれ因になり果となっていくだろうからである。)

こうして、『歴史の----』を再読することで「囚われの思い」を突き詰めるための「仕切り直し」をしよう、そして市井の投げかけた課題を受けとめ直し、課題の達成に向けて何が(どのようにして)なされねばならないかを考えよう、と思い至った。

意識に繋ぎとめられてきたこと

筆者が最初に『歴史の進歩とはなにか』を読んだのは1973年頃である。この著書の一部の章節についてはあるが、克明な抜き書きを含んだ、読んだときに書き綴ったメモが存在する。そのときに参考にして文献の使用状況から、この著書を読んだのが1973年と考えてはば間違いない。

当時、筆者はこの著書を読むことで何を考えたか。いまここで、断片的に書き綴られたメモを一つの文脈に構成する作業を試みたい。そうすることで『歴史の----』を最初に読んだときに感じ、考えたことを呼び起こし、爾来、四半世紀近くを経た今日の私たちを取り巻く状況とその状況に対する筆者の意識を照らし合わせてみたい。そうすることで、筆者の「囚われの思い」から市井の投げかけた課題を受け止める橋渡しとし、そこから課題の達成に向けての展望へ繋げたい。

以下の論述は、このような考えのもとに、当時のメモを二つの纏まりをもった文脈に仕上げたものである。『歴史の----』を再読し、市井の問題意識と主張を改めて把握し直した後、メモに用いられていた文献のうち手許にあるものと再入手できたものを再読した。したがって、メモから仕上げられた以下の論述の背景となる意識と、その意識の下で述べた主張は、『歴史の----』を最初に読んだ1973年当時の筆者のそれであることを断っておく。

《科学・技術と人間の存在》

栗田賢三は、「科学・技術の進歩と現代」という論稿のなかで、この数年来、科学・技術の進歩に含

まれている危険や人類の危機について多くの警告がなされてきていることを指摘し、ローマ・クラブの依頼によってMIT(マサチューセッツ工科大学)が作成した『成長の限界』という「衝撃的」な報告を、次のように紹介している。

それによると、紀元2000年ごろには地球上の人口は70億になり、そのころを境目として地球上の資源が急速に枯渇してゆき、人口1人あたりの工業生産、食糧生産も、資源枯渇とほぼ同じ形のカーブを描いて急速に減少する。そして、このままでゆけば、21世紀中に人類は死滅の運命に見舞われる事になる、というのである。⁵⁾

栗田は、この報告には「いろいろ批判の余地がある」としながらも(なぜなら、この報告は将来の科学・技術の発達を考慮に入れず、各国の政府や資本家が現在のやり方を改めないものとして、現在えられる種々のデータによって予測したものである)、今や「地球が1個の巨大な宇宙船のような有限なシステム」であって、人間の営みが全人類の運命を左右しかねないほどの規模に到っていることを指摘しているものとして、なおこの報告は「無視することのできないもの」であるという。

今日、科学・技術の長足の進歩と日常生活倫理や価値観とのはざまにあって、人間は自らの存在への根源的な問いを発するに至っている。人間が自らについて問い続けるのはギリシャ・ローマの昔を遠く溯る人類の全歴史、おそらく人間が認識と自省の能力を備えるようになって以来のことであろう。しかし、ここで筆者が問題とするのは、栗田が指摘するように、まさに科学・技術の進歩によって人類の危機が警告されるという、20世紀も大半を経過した時点での人間存在のありようへの問いなのである。

確かに科学・技術の長足の進歩は人間の生活上の利便と快適さをますます増大させてはきたが、反面、まさにその科学・技術の進歩の歩調に寄り添うように、ネガティブな事態が様々な形で現出するに至っ

た。市井が『歴史の----』で論究した「価値基準のパラドックス」である。1例のみ挙げよう。

メンデレーフが元素の周期律を発表し、未発見の元素の存在と性質を予言したのは1869年のことであった。その後、飛躍的な発展を遂げるに至った化学や物理学が人間の生活にいかに多大の貢献をしてきたか、ということは科学史の示すところである。しかし、他面、これらの科学は核分裂・核融合の技術操作によって原爆や水爆を生み出し、今や人類は過ちによるボタンひとつが引き金となって絶滅する危機にさらされている。(3、4年前のことか、アメリカで核弾頭を搭載してパトロール中であったB52から1個が誤って落ちたとき、6個の安全弁のうち5個までもが外れていたという息をのみ事故が起こったことを想起しよう。これが、もしアメリカの領土内でなく、例えばキューバの領空近くで起きていたと仮定したら、そしてその際に6個目の安全弁も外れたとしたら—。このように想定しても、あなたが杞憂であるとして退けられるものでもないだろう。)

ところで、栗田は、先のMITの報告書に対して様々な反応が呼び起こされていることを紹介している。その中に、筆者も多少共鳴する見解がある。それは「科学・技術の発展はもうこれくらいでストップしてもいいのではないか」というものである。⁶⁾共鳴すると言っても、地球上に有限であるエネルギーその他の資源と増大する人口との関係を不問に付して、科学・技術の現状維持を主張するというのでは、ない。筆者が言うのは、「速い乗り物にしても、ある一定限度以上の速度のものが、はたして人間に必要なのだろうか」(栗田)という疑問を提出するのと同じレベルでの共鳴なのである。つまり、人間の本当の必要を無視して、自己目的化して進んでゆくような技術には、適当なところで歯止めがかけられるようにしてもいいのではないか、という考えでの共鳴である。

《個人の繁栄と人類の繁栄》

かつて阿部知二は、ある講演会で次のように語ったという。

帝政ロシアの暗さと、ドストエフスキーの作品のあの深さとは切り離せない。だが、ドストエフスキーの作品が生まれるために、帝政ロシアのあの暗い社会があってもいいとは言えない。たとえ、ドストエフスキーのような作品が二度と生まれなくなろうとも、帝政ロシアのあの暗さは除かれねばならない。⁷⁾

ドストエフスキーが帝政ロシアの「小さな人々」を主題にして、多くの作品を世に送り、時代の良心に問いかけることを通して、文学者、思想家としての名声を不朽のものとしていったことは周知のとおりである。文学者ドストエフスキーとして、あるいは思想家ドストエフスキーとして、その名を遍く世に知らしめるに至ったことを個人にとっての一つの成功と見なしてよいのなら、(つまり、自己の思想を世に問い、それが評価されて受け容れられたという意味で)それは生の自己実現という視座から一つの「繁栄」と考えてよいだろう。

ところで、個人の繁栄と人類の繁栄は、人間の歴史のなかでどのような関係にあるのだろうか。両者は調和的共存ないし共同歩調で進むのか、あるいは相互に手段化しあうようなかたちで歴史に織り込まれているのだろうか。このことに関わって、吉野源三郎は、先の阿部の言葉を敷衍して次のように述べている。

第三次大戦を来させないためならば、また、二度と私たちが太平洋戦争の過ちを繰り返さないためならば、(つまり、人類の繁栄を期待するならば、一筆者)そのためにどうしても必要ということならば、あなたは、自分の文学をもそのために犠え(いけにえ)にしてもいいと、(つまり、個人の自己実現＝繁栄を犠牲にしてもいいと、一筆

者) ひそかに考えておられたのではないでしょうか。⁸⁾

吉野は、生前の阿部が平和運動において幾多の貢献をしてきたことを回顧しつつ、このように述べるが、ここには、個人の繁栄と人類の繁栄とが歴史の展開のなかで交錯していくときにもたれる関係について、究極的な願わしさをこめた吉野自身の考えが表出されている。

吉野は別のところで、「人間は自分の歴史を創る。しかし、人間は勝手気儘にそれを創るのではない。自ら選んだ事情の下ではなく、直接眼前にある、与えられた、伝承した諸事情の下に創るのである」というマルクスの言葉を引用しつつ、歴史が人間によって創られるということを述べる。⁹⁾ そして、その場合の歴史創造の機軸として、個人の繁栄と人類の繁栄という問題を切り結ばせている。吉野は、人類の歴史に普遍的なものとしての問題が提起されるとき、究極には、個人の繁栄に目をつぶることを敢えてしてでも人類の繁栄の方が選りとられていくことになる、と考えているようである。そして、そのように考えることには積極的価値が伴うのだ、と判断しているように思われる。彼は、このことを次のように述べる。

一人の人間が万人の運命を、一自分の階級の運命や自分の民族の運命を一何にもまさって心にかけるということは、小さな個体としての人間が、個体を超越する立場に立つことである。そして、個体でありながら自ら個体を超越できるということは、精神というものを備えた人間という存在にだけ可能なことである。それが最も人間的なことだ、といってもよいであろう。しかし、純粹にこの超越が果たされるとき、個体としての自己は、彼にとって、もはや、どうでもよいこととなるであろう。個体としては最期を遂げるのである。¹⁰⁾

この問題についての吉野の考えは、「『一粒の麦もし地に落ちて、死なずば唯一つにてあらん。死なば

多くの実を結ぶべし。』—ホーチミンの一生は、私たちに、この有名な言葉を思い出させる」¹¹⁾と述べていることのなかに、象徴的に表わされていると思う。

以上、手許にあるメモを繋ぎ合わせ、最初に『歴史の----』を読んだ当時の意識と背景において、纏まりをもつ二つのテーマでの論述を試みた。

ところで、市井は『歴史の----』のなかで、今や人間歴史の「進歩の理念それじたいが、まさに懷疑にさらされているのが現代の特徴」であるとし、「進歩」の理念と歴史の現実とは、すでに今日、甚だしいずれを見せるに至ったと指摘した。そして「個人の生涯における進歩・改善の問題と、人間歴史総体の進歩の問題とは、まるでちがっている」と述べ、「単純素朴に必然的『進歩』を信じる歴史観が、ここで根本的に吟味されねばならぬ」として、進歩史観の見直しを提起した。¹²⁾ 先に論述した「科学・技術と人間の存在」および「個人の繁栄と人類の繁栄」は、この市井の「指摘」と「提起」に対応させて、筆者の問題意識を開陳したものであるが、このように開陳することで、市井の「指摘」と「提起」をいっそう強く受けとめることになった。このことは、今に至るも、筆者の意識に繋ぎとめられている。

主体形成の課題に向かって

『歴史の進歩とはなにか』のなかで、「進歩の理念と歴史の現実との甚だしいずれ」を指摘し、「単純素朴に必然的『進歩』を信じる歴史観の根本的吟味」を提起した市井は、自らその作業にとりかかった。

彼は、先ず、そのような歴史観が由来するに至った進歩史観の源泉を18世紀啓蒙思想に求め、チュルゴ、カント、シャトリユ、コンドルセ等の進歩史観を一つひとつ検証し、それらを悉く克服する論述を行なった。そして、マルクスやダーウィン等をてがかりに、進歩思想の類型的整理を行なった後、これまでの進歩史観に採用されていた価値基準ないし価値尺度への懷疑を

表明し、最後に、それらに代わる新しい価値理念（基準・尺度）を自ら提案した。それが先に大野明男による追悼稿でも紹介されていた「各人（科学的にホモ・サピエンスと認めうる各人）が責任を問われる必要のないことから受ける苦痛を、可能な限り減らさねばならない」¹³⁾ というものである。

この新しい価値理念を導出するに至った市井の思索の道筋を、極度に凝縮した図式で示せば、次のようになる。

彼自身の言葉で語らせよう。¹⁴⁾

人間歴史の未来を創るのは、いうまでもなく人間である。



異なった方向へ未来を創ろうとするとき、人間は価値理念の導きを必要とする。

ところで

これまでの思想史で、なんらかの意味で“歴史の進歩”とみなされたことの多くは、逆説的（パラドキシカル）なもの、つまりただか、先行する時代のマイナスをプラスに転じた側面とともに、先行する時代にはなかった新しいマイナスをも生じる逆側面を、かならずともなうものであった。



そのパラドックスをこえるには、過去の“進歩”を導いた諸理念をもこえる必要がある。

その「過去の“進歩”を導いた諸理念をこえる」試みとして提案されたのが、市井のいう新しい価値理念である。

ところで、理念の変革だけで歴史が創り変えられていく訳ではない。実践が不可欠である。しかし、市井は、「実践的に何をすればいいのか、という問題にま

で本書は論及するつもりはない」¹⁵⁾ として、自らの守備範囲を限定し、新しい歴史創造の可能性を条件付で示すに留めた。

パラドックスをよりよく超克した理念に眼覚めて、人間が新しい歴史創造への努力をするとすれば、ようやく人類の歴史は“進歩”へ近づく可能性をつかむだろう。その可能性は、よくいって五分五分であるように思う。¹⁶⁾

みずからが滅びねばならぬ、というところまで自己認識が徹底した場合にのみ、つまりたえず自己否定の契機を活かしつつ、価値理念への接近がどこまでも目指される場合にのみ、人類史には救いの曙光がきざすのではなかろうか。¹⁷⁾

こうして、私たちに課題が残されたのである。彼のいう新しい価値理念を実現するための提言—「不条理な苦痛を軽減するためには、みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身にひき受ける人間の存在が不可欠なのである」—をどう受けとめるか、という課題である。筆者の「囚われの思い」への「仕切り直し」のために、改めて土俵が整えられたということである。

ところで、一口に「創造的苦痛」といっても、その次元と領域はさまざまである。私たちの生が多様であるのに対応して「創造的苦痛」のありようも多様にならざるをえない。その意味で、市井への追悼稿で大野明男が述べていたように「この言葉を、どう読みとるか。また自分の生活設計に、どの程度まで『創造的苦痛をひき受ける』覚悟を組み込むか、などは各人次第」ということではあるだろう。筆者の理解では、「創造的苦痛をひき受ける」とは、比喩的に言って、自分は収穫を手にはすることはできない（かも知れない）が、自己と関わる人々が収穫を手にはすることを自己の喜びとして願い、種を蒔く苦労（苦痛）をひき受ける、ということである。そして、それを突き詰めてゆけば、先に、吉野源三郎が述べていることとして紹介した、

「個体を超越する」ということであり、純粋にこの超越が果たされるとき、「個体としては最期を遂げる」ということであろう。

最初に『歴史の----』を読んでから四半世紀近くを経た今日、インターネットによるグローバル（全地球的）情報の瞬時の伝達に象徴されるように、科学・技術の進歩の度合いは「日進月歩」を越え、まさに「時進日歩」「分進時歩」というのが実感を伴うまでになっている。しかし、一方で、まさにその科学・技術の進歩の帰結の一つとして、湾岸戦争でのピン・ポイント爆撃、TVで戦闘場面をリアルタイムで観ることから生じた戦争のゲーム化の感覚、物質的豊かさと生活の快適さの増大が生み出した人間関係の希薄化、疑似体験の増加と「仮想現実」への浮遊感・という状況や事態ももたらされている。そして、「自然との共生」が叫ばれ、「世界遺産」の保護が始められ、地球の温暖化を防止するために具体的な施策が講じられねばなくなっている。「これだけ物が豊かになり、今後テクノロジーが発展して、個人の欲望がどんどん満たされていくとき、何らかの意味でのそれに対する抑止力がないと、人類の未来は危ういのではないか」¹⁸⁾という警告は、先にのべたように、筆者の意識に繋ぎとめられ続けてきたことでもある。

さて、「仕切り直し」を了えた今、つきつけられた課題にどうとりくむか。その具体策を、ここで直ちに提出することはできない。しかし、不可欠であるのは、市井が次のように述べた「認識」を我がものとしてゆく主体である。したがって、そのような主体の形成を教育の仕事としてひき受け、思索を重ね、方策を探ることのなかに展望を見い出してゆかねばならないだろう。

人間が、ムレ（群）をなして生活している以上、「不条理な苦痛」の処理には、連帯が必要となる。まさに人間かんの連帯が、自分一個の不条理な苦痛の処理にも必要であるという認識が生まれたならば、つぎのことを認識するまであと一步といわねばならない。自分ではなくて他の人間が、自分が負う

ているのと同様の“不条理な苦痛”を軽減しようとして、自分に連帯を求めにくることが必然となる、という認識なのだ。¹⁹⁾

註

- 1) 岩永真理「風と土」『トレール』（板橋勤労者山岳会）No.163, 1990年8月, p.38
- 2) 『赤旗』1990年8月12日号紙上における渡辺 治との対談での弓削 達の言葉。
- 3) 市井三郎『歴史の進歩とはなにか』岩波書店, 1971年。
以下、本稿では各節初出の場合を除いて『歴史の----』と略記する。
- 4) 『図書新聞』1989年7月15日号。
- 5) 粟田賢三「科学・技術の進歩と現代」『現代と思想』No.12, 1973年6月, p.65
- 6) 同上書, p.66
- 7) 阿部知二の葬儀にあたっての、吉野源三郎による悼辞のなかの言葉。『図書』No.286, 1973年6月, p.36
- 8) 同上書, p.36
- 9) 吉野源三郎「一粒の麦 ―ヴェトナム再論」『世界』No.330, 1973年5月, p.51
- 10) 同上書, p.52
- 11) 同上書, p.52
- 12) 市井, 前掲書, pp.10~16
- 13) 同上書, p.143
- 14) 同上書, pp.201~207
- 15) 同上書, p.211
- 16) 同上書, p.208. 傍点は市井による。
- 17) 同上書, p.216
- 18) 河合隼雄「日本の教育の底にあるもの」『中央公論』1997年10月号, p.64. これは、村上陽一郎の言葉であるとして、河合が紹介しているものである。
- 19) 市井, 前掲書, p.210

(1997年12月1日 受理)